

沢村貞子著「老いの楽しみ」岩波書店 1993 年 9 月 8 日刊を読む

わたしの乱読時代

1. 小雨の降る朝、傘をさして大きい竹籠を持ち、いつものように新聞をとりに行った。郵便箱にギッシリ押し込まれている 6 種の新聞にはそれぞれ、アート紙の綺麗な広告がはさみこまれ、老女の腕には抱えきれないほど重い。
2. わが家には殆んど必要のないちらしをとり出し、身軽になった新聞は取りあえず、居間の机の上に置く。ゆっくり読むのは朝食の仕度、あと片づけがすんでからのこと。10 時から 1 時間半か 2 時間が、私たちにとって大切な「新聞のお時間」である。
3. 去年の暮、私は 60 年間つづけた女優を廃業したし、家人が評論家の仕事をやめたのは 3 年ほど前のこと——二人とも、残りの人生をゆっくり暮らしたいと思っている。
4. それなのに——なぜ、いまでも毎日、たくさんの新聞を読むのか、と不思議そうな顔をするのは、私より 10 歳ほど若い未亡人である。彼女は 7、8 年前から新聞をとっていない。
5. 「だって、ニュースはテレビで見られるし、年寄りはあるな面倒なもの、見ることはないでしょ。目が疲れるだけだもの」
6. そうかも知れない。世間の話題になるような出来ごとは、朝晩テレビが知らせてくれる。でも…
…私たち夫婦は、老眼鏡を拭きながら、つぎつぎと新聞に目を通す。
7. 「どうしたの？なぜそうなったの？これから、どうなるのかしら？」
知りたがりやの老人が、繰り返し、たしかめることができるのは、やっぱり、活字である。同じ問題を扱っている新聞の論調がそれぞれ違っているのも面白い。
8. 私たちのうち、一人が用事のあるときは、ゆっくり読んだ方が、「本日のおすすめ品」として、大事な記事を赤い鉛筆で囲んでおく。夜更けて、それを見るのも楽しい。一つの新聞に、一つだけでもそんな記事があれば、新聞代は高くない。雑事に疲れた頭の適当な体操にもなるし、多少、呆けるのがおそくなるかも知れない。
9. 人間はみんな寂しい。ひとりでは生きられない。だから——他の人がどんなことをどう考えているのか……それが多少でもわかれば、心が豊かに優しくなるような気がする。

10. 新聞のあとは読書——居間に積み重ねてある本を少しずつ読むおかげで、長い人生に退屈しないのもうれしい。
11. 私の育った東京の下町、浅草の家にはあんまり本がなかった。歌舞伎芝居の奥役——プロデューサーのようなことをしていた父の部屋に飾ってあったのは、「河竹黙阿弥」と「鶴屋南北」の全集だけ——押入れに、雑誌、文藝倶楽部が何冊かはいていた。
12. 私が(本が読みたい)としきりに思ったのは、小学校から帰ったあと、母に代って、子役の弟の付き人をするようになってからだった。近くの芝居小屋で、毎日、弟の舞台をみているうちに、私の小さい頭にフッと疑問がおきた。
13. 「先代萩」の政岡役も「重の井子別れ」の重の井役も、みんな優しい母親なのに、なぜ、可愛い自分の子を目の前で死なせたり、突き放したりするのかしら？
14. みんな、あとで「お主^{しゅう}のため」と泣きくずれるけど「お主^{しゅう}」って何かしら？それがどうしても知りたくなった。家へ帰って、母に聞くと、
「私は学問がないからわからないよ」
と言うだけだし、父には叱られた。
15. 「昔から、お主^{しゅう}のためには何でもする、と決まってるんだ、つまらないことを聞くな」
小学校の先生にはもっと怒られるような気がして、聞けなかった。
16. (本に書いてあるかも知れない)その頃は女が本を読むと生意気だと言われたが——父の留守に二階の雑誌をそっと拵げた。小説というのをはじめて読んだが、とても面白かった。
17. その中で、いまでも心に残っているのは、蜆売^{しじみう}りの貧しい少年が、自分の恩人を殺そうとしている悪侍に橋の上でいじめられる話だった。恩人の居場所を言わないために、悪侍が少年のやわらかい手を小柄^{こづか}でプツリと刺す……それでも唇をかんで耐えている……その先はこわくて読めなかった。
18. (私ならしゃべってしまうかも知れない……弱虫だから)そう思うと恥しくなって、その晩、うなされた。母に「女の子のくせに本ばかり読むから」と叱られたけれど……2、3日して、またそっと二階へあがっていった。
19. 歌舞伎の全集ものは、むずかしい字がたくさんあって、わからない。(勉強して、いろんな本が読めるようになりたい)その一心で、やっと両親を説得して女学校へゆくようになった。芝居ものの下町娘としては珍しかった。父の条件は、家事を怠けないことの他に、学費は自分で稼ぐことだった。その頃、気違いじみた好景気のあとのひどい不況でたくさんの銀行がつぶれ、父の貯金もな

くなっていた。

20. 歩いて通えて月謝の安い府立高女に運よく合格した私は、アルバイトとして家庭教師をはじめた。下町には珍しかったせいか、週 2 回として 1 カ月 5 円の月謝は悪くなかった。大学出の初任給が 50 円から 60 円の頃である。この世知辛い世の中でお金を稼ぐためには遊び半分ではだめ、ということとを庶民の娘はよく知っていた。
21. 15 歳の女学生先生は、小学校 5、6 年の後輩を相手にただもう一生懸命だった。生徒は 5 人、6 人とふえ、月収 30 円にもなった。娘らしいお洒落にいっこう、興味のなかった私にとって、学校の費用一切を払ったあと、好きな本を買うのに充分なお金だった。
22. 学校の帰り道、雷門の本屋へ寄るのが楽しみだった。その当時、1 冊 1 円で売り出された全集を「^{えんぼん}円本」と呼んだ。「現代日本文学全集」につづいて、あちこちの出版社から出されたこぶりの綺麗な全集を、私はせっせと買い込んだ。机を置かせてもらった玄関の三畳の壁際にずらりと並べた本を見て、父は、
「貸し本屋じゃあるまいし、色気がない」
と眉をひそめたものだった。
23. (人間は何のために生きているのかしら？これからどう生きたらいいのだろうか？)
年ごとにふくらむ疑問に、この本が少しずつ答えてくれるような気がした。
24. 「芝居ものの娘が……」とまわりの人たちに呆れられながら、私は女子大へ通った。家庭教師の口は増え、学費は充分だった。ただ——アルバイトが忙しすぎて、せっかく買った本がゆっくり読めないというのは、おかしい……と気がついてすこしずつ生徒をへらした。
25. 大学へ行ったのは、その囲いの中で静かに本を読み、考え——私の青春を充分悩みたい……それだけが願いだった。
26. 4 年近い大学生活の間、私が夢中で読んだのは小説、戯曲ばかりだった。その頃、表面静かな学園の中にも、時折り不況の冷たい風が吹きこんできた。農村では娘が売られ、工場や炭坑で次々ストライキが起き、治安維持法が改正された。大学の中でも、左翼の本をもっただけで寮生が放校される事件もあって、心が痛んで眠れない夜がつづいた。
27. そんな中で、私が思想的な本はいっさい避けて文学書ばかり読んでいたのは、自分が社会運動に向かないことを知っていたからだだった。貧しいけれど、住む家、食べるものに不自由しなかった日向の雑草……情にもろい下町娘は、社会に対して厳しい戦いをいどむことはとてもできないと思った。

28. 後年、私が治安維持法に触れたのは「真面目に働く人がみんな幸福になるための運動」に心を動かされたからだった。

29. お互いにたすけあう人間の愛情を、シュニッツラーの『盲目のジェロニモとその兄』やO・ヘンリーの『最後の一葉』など、たくさんの本が教えてくれた。西鶴・一葉・緑雨から、ドストエフスキー、チェーホフ、ゾラなど……文字通りの乱読だったけれど、おかげで、一生懸命、考えたり悩んだりして、どうにか自分なりに生きてきた私に、すこしも悔いはない。

30. 若いときから、読書の習慣が身についたことを、いまも、何よりの幸せ、と思っている。

P90～97

<コメント>

本書で、沢村貞子さんから新聞を読む意味、読書をするものの意味を教えて頂いたことはとてもありがたい。「読書の習慣が身についたことを、いまも、何よりの幸せと思っている」沢村さんの生き方は素晴らしい。

— 2016年7月26日(火) 林 明夫記 —